論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（教育学）	氏名	村 井　隆 人
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

説明的文章の批判的読みの教育評価に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	間 瀬　茂 夫
審査委員	教　授	山 元　隆 春
審査委員	教　授	難 波　博 孝
審査委員	准教授	渡 部　倫 子

〔論文審査の要旨〕

国語科の学習指導において学習者による言語表現を客観的に評価することは難しく，国語教育研究における教育評価の領域は，遅れた研究領域の一つである。教育改革が進み，目標とする学力が高次化することで，国語学力の評価は難しさを増している。そうした中で，本論文は，高次の読みの能力である説明的文章の批判的読み（クリティカル・リーディング）の学力形成過程において，どのように教育評価を行うべきかという問題に取り組んだものである。

論文の構成は，次の通りである。

第１章では，説明的文章の批判的読みの学習指導と教育評価に関して，「批判」および「形成的評価」の概念を措定しながら，先行研究における課題を明らかにした。批判的思考に関して，対象に向かう「合理性」のみならず，自己の認知のあり方を対象とする「反省性」に注目するとともに，形成的評価については，教師が学習者を評価する「学習の評価」のみならず，指導の改善にフィードバックする「学習のための評価」，学習者が自己の学習成果を評価する「学習としての評価」を評価研究の枠組みとして設定した。

第２章では，説明的文章の批判的読みの構成要素と読みの水準について検討を行っている。批判的思考研究においては，スキルのみでは必要かつ十分な批判的思考が行われないため，情意的な側面である「情意的性向」の重要性が指摘される。そうしたことから，批判的読みのプロセスに「情意的性向」を位置づけるとともに，中学校説明的文章教材の分析と対応させることで，どのような読みの局面や水準において，どのような種類の批判的思考が重要となるのかをモデル化した。

第３章では，合理性や反省性の観点に基づく「批判的読みの評価モデル」を構築している。マルザーノらによる「新しいタキソノミー」を説明的文章の読みに適用し，「知識」「認知システム」「メタ認知システム」「自律システム」といった枠組みに基づいて，「批判的読みの評価モデル」を構築した。この評価モデルは，具体的な説明的文章教材の批判的読みの過程を想定することを容易にするものであり，また，学習や授業の場面における実際の学習者の批判的読みを評価するポイントを明確にするものとなっている。

第４章では，説明的文章の批判的読みの学力の獲得を目標とした授業の授業観察を行い，「批判的読みの評価モデル」により，授業における学習者の批判的読みや教師による評価行為を記述することを行うとともに，そのことを通して，批判的読みの授業における指導と評価の現実的な課題を明らかにした。

第５章では，反省性を伴った批判的読みの指導における「学習のための評価」と「学習としての評価」のあり方を明らかにするために，中学校において，教科書の説明的文章教材を用いて二つの実験授業を行っている。実験授業１では，学習者の批判的読みを教師がいかに評価し，授業にフィードバックし得るかということに焦点を当てた実験授業を行った。教師による適切な評価を学習者にフィードバックすることにより，文章への「過度な批判」を脱することができた。実験授業２では，学習者の自己評価に焦点を当てた実験授業を行った。合理性と反省性を両立させる批判的読みのための思考ツールを開発し，授業において活用しながら，「学習としての評価」を行わせた。こうした評価活動によって，批判的読みの水準が向上することが明らかになった。

第６章では，以上の検討をもとに構築した「批判的読みの指導と評価モデル」を提示している。楠見による批判的思考モデルに見られた「仕様判断プロセス」「適用プロセス」「表出判断プロセス」という段階に沿って，教師による指導と学習者による読みと学習としての評価，認知水準とを関連させた指導過程と評価とを関連させた全体的な学習指導モデルが提案された。終章では，以上の研究の成果を総括している。

以上をふまえると，本論文は，次の３点において高く評価できる。

１．まず中学校段階における説明的文章の批判的読みの学力形成と教育評価のあり方について，指導項目や評価の観点を列挙するという形ではなく，批判的読みの認知的なプロセスに基づいた評価モデルを示したことである。その際，対象であるテクストに向けられる批判の認知的スキルの側面ばかりでなく，読み手の意識や自己に向けられる反省性の重要性に注目した点も評価される。

２．次に，構築した評価モデルについて，授業改善に資する「学習のための評価」と，学習者が自己を評価する「学習としての評価」という観点から，授業観察および実験授業を通して，実際に批判的読みの学力を形成しながら，実証的に評価モデルの有効性の検証を行ったことが挙げられる。学力形成のための中学校段階における批判的読みは，授業においてそうした読みを学習の目標とすること自体，十分になされているわけではない。したがって，評価方法のみを焦点化することは現実的でなく，学力形成のための授業を設計しながら，モデルの検証を行ったことに意義がある。

３．学習者のための説明的文章の批判的読みを行わせるためのツールや，教師のための評価モデルおよび授業モデルを開発することで，批判的読みにおける合理性と反省性を両立させる具体的な学習方略や指導方略を提示することができたことも，本研究の意義である。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成３０年　２月１５日